岐阜市とその近郊に生活する一〇代と二〇代の、知的障害や自閉性障害をもつ若者たちが、毎週日曜日の午前中、演劇集団《ドキドキわくわく》に集まってくる。彼ら・彼女らは、舞台を創り、舞台で学び、そして舞台を遊ぶ。ここでは、そんな彼ら・彼女らを主人公としたこころ揺れる青春、こころ躍る青春の季節を綴っていきたいと思っている。

劇団《ドキドキわくわく》は六年前にひとりの女性教員の呼びかけから始まった。当初は参加者も集まらず、細々としたスタートであったが、この会の活動のおもしろさが人から人へと伝わり、現在では三〇余名の大集団となり、公演回数も一〇回を超えた。

演劇のテーマは「愛と性」。だれもが迎える第二次性徴、そして思春期。自分の身体（の変化）に違和感を抱き、人を好きになるという想いがこころを揺らす。その一方で、子どもでもなく大人でもない宙ぶらりんな状況にさらされ、将来への不安にこころをかき乱す。このような経験は、私たちだれもが通り過ぎてきた道のりに必ずあったはずである。思い起こせばずいぶん恥ずかしいこともあったけれど、なんとなく懐かしい過去でもある。

ここで登場してくれる若者たちは、思春期そして青年期の真っただ中にいる。読者のみなさんご自身の過去と若者たちの現在とを重ね合わせ、若者たちの姿のなかに自分を見、そして若者たちの明日を一緒に考えてもらえればうれしく思う。

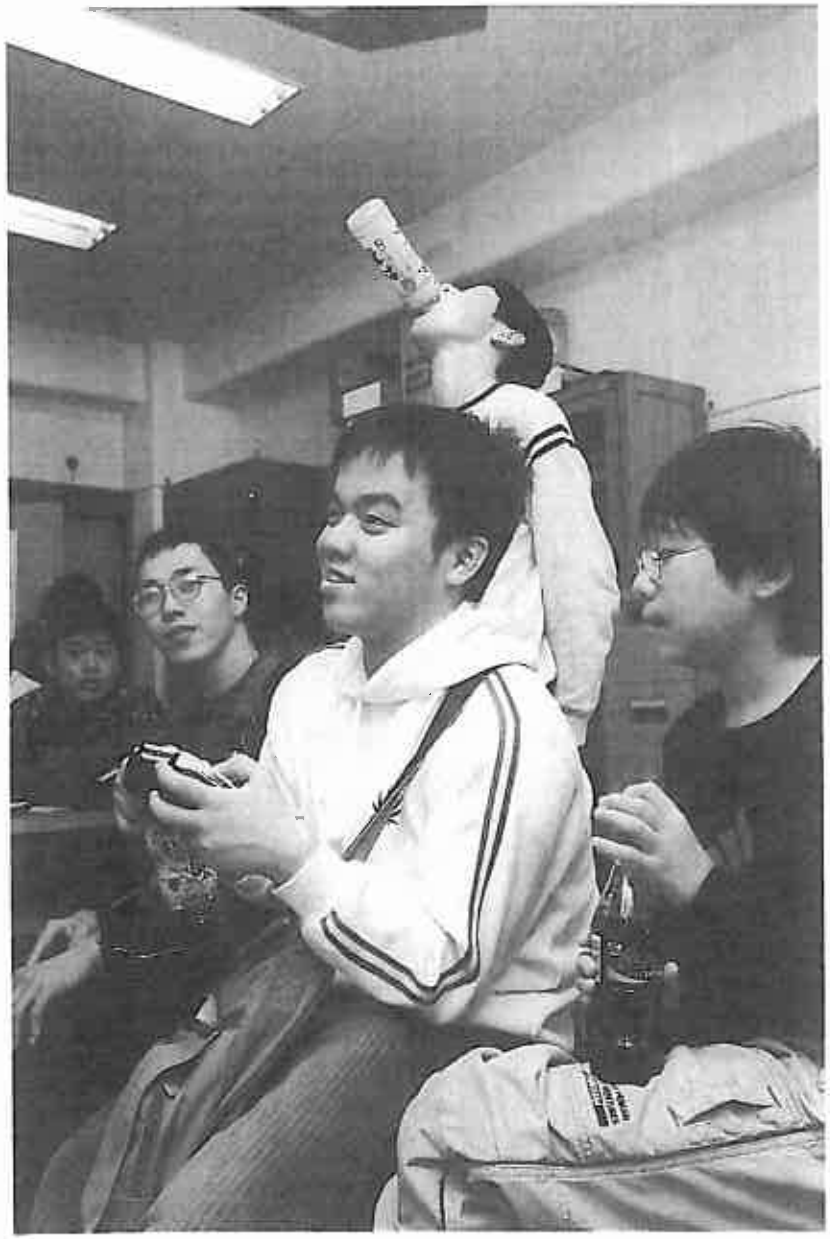
●●●

「愛と性」が演劇のテーマであると言っても、だれもがそのテーマに惹かれて集まってきたわけではないようだ。仲間（これからは、この劇団に集う若者たちをこう呼んでいく）のひとりのお母さんが言っていた。

「とにかく、土曜と日曜の二日間、一日中パジャマで過ごす生活をなんとかさせたかったのよね」

仲間たちは、平日は学校や職場に通っている。しかし、週末はなにもすることがない。親がどこかに連れていかなければなにもないまま休日は過ぎていく。友だちと一緒に遊びにいくなんてことはほとんどない。劇団の指導者は、「愛と性」から遠ざけられ、「愛と性」を教えられてこなかった仲間たちに、「愛と性」に真正面から向き合える若者になってほしいという想いでこの演劇という活動をはじめたつもりであった。それが、いつのまにか仲間たちの「居場所」という性格をもつようになった。仲間たちが毎週集う一番の動機は「友だちに会いたい」ということだ。だから、土日の活動の場が別に用意されていれば、必ずしも演劇でなくてもよいのかもしれない。

別のお母さんが言った。



「なんでもありの空間なのよね」

学校でも職場でも、仲間たちはいろいろな制約のもとで生活している。規則に縛られ、やらねばならないことを求められ、時間に追われる。だったら「家でのんびり」というのもひとつの選択肢かもしれない。しかし、仲間たちは毎週日曜日、早起きをして集まってくる。この場に来ても、練習に参加することは強要されない。いやなら見ているだけでもよいのだ。ゲームに興じている仲間もいる。そういう仲間たちも、本番前になると練習に加わってくるからおもしろい。

これまた別のお母さんが言った。

「そのときの自分の気分を理由にして行動できるところなんです」

言いえて妙である。この「自由さ」が魅力なんだろう。

「自由」が認められると言っても、活動の中心は演劇である。いずれは観客の前で上演しなければならない。舞台の上では、多少のアドリブを利かすことは許されても（これがまた難しいのだが）、基本的には演出と台本に縛られる。そのような意味では自由は許されない。しかし、実際の舞台で演技するとなると、自由にならなければ（つまり自分の身体を随意に動かすことができなければ）思ったように声を出すことはできない。しなやかにふりをつけることもできない。舞台の上とはなんとも厄介な場所である。「自由であって、自由でない場所。でも自由でなくては務まらない場所」。それが舞台であり、劇団《ドキドキわくわく》なのだ。

紹介が遅くなったが、この劇団の主宰者は渡辺武子さんと言う。渡辺さんは、中学校の保健体育の教師であったため、もともと性教育には強い関心があった。そんな彼女が障害児教育にかかわり、障害をもつ生徒たちの思春期にこそ「愛と性」を学ぶことの必要を痛感する。退職後も「愛と性」を学ぶ要求をもった障害者がいるはずだという確信をもってはじめた活動であった。座学では続かないという経験を踏まえ、「演劇」という活動を導入した。

幸いなことに、地元のプロの劇団で活動している演出家兼俳優の島源三さんが指導に加わってくれることになった。そして、本番の公演では、やはりプロの照明や音響のスタッフが協力してくれることにもなった。みなさん手弁当での協力である。こうして単なる趣味のレベルを超えた活動としてのお膳立ても整っていった。

渡辺さんが言う。

「最初は演劇をとおして愛と性を学ぶことを目的としていたのだけれど、仲間たちがこんなにいろんな姿を見せるとは思わなかった。それは学校ではけっして見せてくれなかった姿なんですよね」

ここからも仲間たちの自由さが見えてきそうだ。

ところで、先ほど、「『演劇』でなくても、『愛と性』でなくてもなんでもよい、居場所さえあれば」と述べたが、はたしてそうなのだろうか。やはり「愛と性」が土台に座った「演劇」だからこそ、仲間たちを惹きつけたのだろうと思う。渡辺さんはさらに言う。

「『愛と性』をテーマにした演劇には、彼らにとっていわばパンドラの箱を開けるような恐れと喜びが渦巻いている」

思春期のころ、私は自分の身体の奥底にうごめくものの正体を知りたかった。学校では教えられなかったけれど、友だちと話して自分だけではないと安心し、また本を調べたりもした。演劇の仲間たちだって知りたい欲求はあるだろう。でも、友だちとそれを話題にする機会もなければ、本を読んで理解することが困難なことも多いであろう。多くの学校ではきちんと教えられていない。むしろセクシュアルなことば自体が禁句にされていることもある。男女交際などもってのほかだという大人の想いも強い。しかし、この場所では「愛と性」の話題はオープンである。台詞には禁句であったセクシュアルなことばがいっぱい出てくる。そういう意味での自由もある場所なのだ。

本書のタイトルは『ラフ《Rough》・ラブ《Love》・ライブ《Live》』。

ラフ《Rough》とは、「粗野」「大雑把」「粗削り」「荒模様の」「凸凹の」「自然のまま」「未完成」「仕上がっていない」という意味がある。あまりいいイメージを喚起しないようなことばとも言える。みなさんは『ラフ』という漫画をご存知だろうか。『タッチ』などで有名な漫画家あだち充さんの作品で、高校の水泳部を舞台としたラブ・コメディーである。その作品のなかで、あだちさんは登場人物に次のように語らせる。

「どんな見事な絵もまず最初はラフな下がきからはじまる。つまりおまえたちのことだ。おまえたちはまだまだ下がきの段階である。これからなん本もなん本も線を重ね、下がきをくり返し、その

なかから自分自身で一本の線を選びだすんだ」（『ラフ』小学館、一九九五年）

ラフとは、けっしてマイナスイメージではなく、「葛藤しつつ可能性を秘めている」という意味で若者たちを形容することばのように感じられないだろうか。そんな《ラフ》な彼らが「愛と性」に出会い（＝ラブ《Love》）、いまを生き、舞台で弾ける（＝ライブ《Live》）。『ラフ・ラブ・ライブ』というタイトルは、この演劇集団に集う仲間たち、青年期を生きる若者たちの心性を探るのに最も適したことばではないかとひとり悦に入っている次第である。

本書は大きく二つの内容で構成されている。ひとつはこの劇団に集う仲間たちが示すこころの揺れを「ラフ」・「ラブ」・「ライブ」ということばで形容させながら、それぞれ「友だち関係や親子関係の在り様」「異性に対する想い」「演ずることの発達的意味」をとおして探ることを目的とした（第一部、なお、ここでの記述は雑誌『みんなのねがい』の二〇一〇年度連載に加筆修正をしたものである）。続いて、劇団の指導者である渡辺武子さんと島源三さんに、教師と演出家という視点から、この演劇集団への想いを語ってもらいながら、第一部で私が述べた内容をさらに深めていくことを目的とした（第二部・鼎談）。あわせて、これまでに上演した三つの作品のシナリオを掲載した（資料）。演劇活動を近くで見続けてきた私の記述と、指導者として活動を組織し作品として仕上げてこられたお二人のことば、そしてその完成品であるシナリオをとおして、演劇集団《ドキドキわくわく》が創造してきたものを具体的に理解していただければとねがっている。

さあ、若者たちが創造する舞台の幕を開けることにしよう。

第一部

こころ揺れる青年期の発達を語る